地人館 E-books
Compact

デモ版 pdf

悪人正機・絶対他力の
親鸞の心をつたえる

歎異抄【原文と現代語訳】

田中治郎 著

はじめに

『歎異抄』は真宗・浄土真宗の開祖親鸞（しんらん）の没後、弟子の唯円（ゆいえん）が教えが異なって伝わっていることを歎（なげ）き、師の言葉を書きとめたという書物である。前書きに続いて十八章と後序、蓮如による奥書（おくがき）がある。本書にはそれらの原文と現代語訳を掲載した。また、内容を把握しやすくするため、区切りに見出しを補足した。

原文は『浄土真宗聖典』（本願寺出版社）による。

目次

序言　他力の教えを乱すな
第一条　宗教と倫理
第二条　地獄は一定すみかぞかし
第三条　善人なをもつて往生をとぐ、いはんや悪人をや
第四条　聖道門の慈悲と浄土門の慈悲
第五条　父母の供養のための念仏はしたことがない
第六条　親鸞は弟子一人ももたず候ふ
第七条　無碍の一道
第八条　念仏は行でもなければ善でもない
第九条　浄土へ往きたくないこころ
第十条前半　念仏は計り知れないもの
第十条後半　教えの散逸
第十一条　誓願不思議か名号不思議か
第十二条　学問と往生
第十三条　本願ぼこりは救われないのか

第十四条　念仏は滅罪の行ではない
第十五条　この世で悟りは開けるのか？
第十六条　回心と自然
第十七条　極楽の辺境に生まれることの意味
第十八条　布施の多少で功徳は変わるか？
後序　『歎異抄』の総まとめ
流罪記録
奥書

第三条　善人なをもつて往生をとぐ、いはんや悪人をや

【原文】

善人なほもつて往生をとぐ、いはんや悪人をや。しかるを世のひとつねにいはく、「悪人なほ往生す、いかにいはんや善人をや」。この条、一旦そのいはれあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆゑは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこころかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のこころをひるがえして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。煩悩具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるることあるべからざるを、あはれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。よつて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、仰せ候ひき。

【現代語訳】

善人でさえも往生を遂げるのだから、いわんや悪人が往生を遂げるのはあたりまえなのです。ところが世間の人は常に、「悪人ですら往生するのに、どうして善人が往生しないというような

ことがあろうか」と言います。この理屈は一応正当のように聞こえますが、阿弥陀仏の本願と他力の教えに反します。その訳は、自力で善をなそうとする人（善人）は、ひたすら阿弥陀仏にすがって他力にお任せしようというこころが欠けているので、そのぶん阿弥陀仏の本願から外れてしまうからです。

しかしながら、そのような自力の心をひるがえして（阿弥陀さまを頼り）、他力におすがりすれば、真実の浄土へ往生することができるのです。欲や執着など、さまざまな煩悩を抱えた私たちが、どんな行を行っても苦しみのこの世界から脱却できないことを哀れみ、阿弥陀仏は（前に言った）あの（四十八願中十八番目の）願をお立てになりました。その本意は、悪人をこそ成仏させようということですから、他力にすがろうとする悪人こそ浄土に往生するのにふさわしいのです。したがって、善人だって往生するのだから、まして悪人が極楽へ行くのは当然ではないか、と親鸞聖人は言われました。

第十六条　回心と自然

【原文】

信心の行者、自然にはらをもたて、あしざまなることをもをかし、同朋・同侶にもあひて口論をもしては、かならず回心すべしといふこと。この条、断悪修繕のここちか。一向専修のひとにおいては、回心といふこと、ただひとたびあるべし。その回心は、日ごろ本願他力真宗をしらざるひと、弥陀の智慧をたまはりて、日ごろのこころにては往生かなふべからずとおもひて、もとのこころをひきかへて、本願のたのみまゐらするをこそ、回心とは申し候へ。一切の事に、あしたゆふべに回心して、往生をとげ候ふべくは、ひとのいのちは、出づる息、入るほどをまたずしてをはることなれば、回心もせず、柔和・忍辱のおもひにも住せざらんさきにいのち尽き〔な〕ば、摂取不捨の誓願はむなしくならせおはしますべきにや。口には願力をたのみたてまつるといひて、こころにはさこそ悪人をたすけんといふ願、不思議にましますといふとも、さすがよからんものをこそたすけたまはんずれとおもふほどに、願力を疑ひ、他力をたのみまゐらすこころかけて、辺地の生をうけんこと、もつともなげきおもひたまふべきことなり。信心定まりなば、往生は弥陀にはかられまゐらせてすることなれば、わがはからひなるべからず。わろからんにつけ

ても、いよいよ願力を仰ぎまゐらせば、自然のことわりにて、柔和・忍辱のこころも出でくべし。すべてよろずのことにつけて、往生にはかしこきおもひを具せずして、ただほれぼれと弥陀の御恩の深重なること、つねにおもひいだしまゐらすべし。しかれば念仏も申され候ふ。これ自然なり。わがはからはざるを、自然と申すなり。これすなはち他力にてまします。しかるを、自然といふことの別にあるやうに、われ物しりがほにいふひとの候ふよし、うけたまはる、あさましく候ふ。

【現代語訳】

信心深い（念仏の）行者でも、たまたま腹を立てたり、悪いことをしたり、仲間たちと会って口論をしてしまったりもするが、そんなときに必ず回心しなければならないということ（そんな説が流布しているが）、このような説は悪を断ち、善を修めよという考えから来るのでしょうか。

ひたすら念仏の道を歩む人においては、回心ということは、ただ一度だけしかありません。その回心とは、日ごろ本願他力の真の教えを知らない人が、阿弥陀仏の智慧を賜り、日ごろの（自力を頼むような）こころでは往生できないと思って、そのこころをひるがえし、（弥陀の）本願を頼るようになることをいうのです。すべてのことに朝夕回心することによって往生を遂げられるというのなら、人の命は息を吐いて次に吸う瞬間くらいの間に終わる（はかない）ものだから、回心もせず、柔軟で忍耐力のあるこころにならないままで命が尽きれば、阿弥陀仏の「一人も捨てずに救済する」という誓願はむなしくなってしまうというのでしょうか。口で阿弥陀仏

の本願の力をお頼みするといい、こころで悪人を救い取りたいという願は不思議で（尊い）なあと思っていても、（こころのどこかで）阿弥陀仏は善人からお助けになるのではないかと仏の本願の力を疑い、他力を頼むこころが欠けているので、（そういう人は）浄土の辺鄙なところにしか往生できないことになってしまうのです。これは最も歎かわしく思うことです。

信心が定まれば、往生は阿弥陀仏のはからいで達成させてもらえることなのであり、私たちがはからうことではないのです。自分が悪いことをしてしまった場合でも、いっそう阿弥陀仏の本願の力を仰げば、自然のことわりで柔軟で忍耐力のあるこころが出てくるのです。万事につけて、極楽往生のためには利口ぶるような思いを持たず、ただほれぼれと阿弥陀仏のご恩の深さ、重さを常に思い出すべきです。そうすれば（しぜんに）念仏が口をついて出てきます。これが「自然」です。自分がはからわないことを「自然」というのです。これがすなわち他力です。それなのに、物知り顔に「自然」ということが別にあるように言う人がいるようですが、なんとも歎かわしいことです。

後序『歎異抄』の総まとめ

【原文】

右条々は、みなもつて信心の異なるよりことおこり候ふか。故聖人（親鸞）の御物語に、法然聖人の御とき、御弟子そのかずおはしけるなかに、おなじく御信心のひともすくなくおはしけるにこそ、親鸞、御同朋の御なかにして御相論のこと候ひけり。そのゆゑは、「善信（親鸞）が信心も聖人（法然）の御信心も一つなり」と仰せの候ひければ、勢観房・念仏房なんど申す御同朋達、もつてのほかにあらそひたまひて、「いかでか聖人の御信心に善信房の信心、一つにはあるべきぞ」と候ひければ、「聖人の御智慧・才覚ひろくおはしますに、一つならんと申さばこそひがことならめ。往生の信心においては、まつたく異なることなし、ただ一つなり」と御返答ありけれども、なほ「いかでかその義あらん」といふ疑難ありければ、詮ずるところ、聖人の御まへにて自他の是非を定むべきにて、この子細を申しあげれば、法然聖人の仰せには、「源空が信心も、如来よりたまはりたる信心なり、善信房の信心も、如来よりたまはらせたまひたる信心なり。されば、ただ一つなり。別の信心にておはしまさんひとは、源空がまゐらんずる浄土へは、よもまゐらせたまひ候はじ」と仰せ候ひしかば、当時の一向専修のひとびとのなかにも、親鸞の

御信心に一つならぬ御ことも候ふらんとおぼえ候ふ。いづれもいづれも繰り言にて候へども、書きつけ候ふなり。露命わづかに枯草の身にかかりて候ふほどにこそ、あひともなはしめたまふひとびと［の］御不審をもうけたまはり、聖人（親鸞）の仰せの候ひし趣をも申しきかせまゐらせ候へども、閉眼ののちは、さこそしどけなきことどもにて候はんずらめと、歎き存じ候ひて、かくのごとくの義ども、仰せられあひ候ふひとびとにも、いひまよはされなんどせらるることの候はんときは、故聖人（親鸞）の御こころにあひかなひて御もちゐ候ふ御聖教どもを、よくよく御覧候ふべし。おほよそ聖教には、真実・権化ともにあひまじはり候ふなり。権をすてて実をとり、仮をさしおきて真をもちゐるこそ、聖人（親鸞）の御本意にて候へ。かまへてかまへて、聖教をみ、みだらせたまふまじく候ふ。大切の証文ども、少々ぬきいでまゐらせ候うて、目やすにしてこの書に添へまゐらせて候ふなり。聖人（親鸞）のつねの仰せには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、それほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐候ひしことを、いままた案ずるに、善導の「自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしづみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」（散善義）といふ金言に、すこしもたがはせおはしまさず。さればかたじけなく、わが御身にひきかけて、われらが身の罪悪のふかきほどをもしらず、如来の御恩のたかきことをもしらずして迷へるを、おもひしらせんがためにて候ひけり。まことに如来の御恩ということをば沙汰なくして、われもひとも、よしあしといふこと

のみ申しあへり。聖人の仰せには、「善悪のふたつ、総じてもつて存知せざるなり。そのゆゑは、如来の御こころに善しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、善きをしりたるにてもあらめ、如来の悪しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、悪しさをしりたるにてもあらめど、煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」とこそ仰せは候ひしか。まことに、われもひともそらごとのみ申しあひ候ふなかに、ひとついたましきことの候ふなり。そのゆゑは、念仏申すについて、信心の趣をもたがひに問答し、ひとにもいひきかするとき、ひとの口をふさぎ、相論をたたんがために、まつたく仰せにてなきことをも仰せとのみ申すこと、あさましく歎き存じ候ふなり。このむねをよくよくおもひとき、こころえらるべきことに候ふ。これさらにわたくしのことばにあらずといへとも、経釈の往く路もしらず、法文の浅深をこころえわけたることも候はねば、さだめてをかしきことにてこそ候はめども、古親鸞の仰せごと候ひし趣、百分が一つ、かたはしばかりをもおもひいでまゐらせて、書きつけ候ふなり。かなしきかなや、さいはいに念仏しながら、直に報土に生れずして、辺地に宿をとらんこと。一室の行者のなかに、信心異なることなからんために、なくなく筆を染めてこれをしるす。なづけて『歎異抄』といふべし。外見あるべからず。

【現代語訳】

右の各条に記した事柄は、全て信心の相違から起こることなのでしょうか。亡くなった親鸞聖人は、生前次のようなお話をなさいました。法然聖人がいらっしゃったころ、多くの弟子の中には聖人と同じ信心を持つ人が少なく、そのため親鸞聖人と彼ら同朋の間で相論が起こりました。その訳は、親鸞聖人が「善信（親鸞）の信心も（法然）聖人の信心も一つのものであり、同じです」と言うと、勢観房や念仏房というような同朋たちは、もってのほかだと言って論争をしかけてきました。「なんで法然聖人の信心と善信房（親鸞）の信心とが一つであり、同じだなどといえるのか」と言うので、「法然聖人の智慧や才覚は広くていらっしゃいますから、（その点で）一つだなどと言っては思い上がりだと思います。けれど、往生の信心においては全く異なることはないと思います。一つのものだと思います」と親鸞聖人は答えました。それでもなお、「どうしてそんなことが言えるのだ」と疑いを発せられ、非難を受けたので、つまるところ法然聖人の前でどちらが正しいか決着をつけようということになり、法然聖人にこの子細を申しあげました。すると法然聖人は、「源空（法然）の信心も阿弥陀如来にいただいた信心です。善信房（親鸞）の信心も阿弥陀如来からいただいた信心です。だから同じ一つのものです。それを別だと言う人は、私が往く浄土へは往かれそうもありませんね」とおっしゃいました。最近ひたすら念仏を称えると言っている人の中にも、親鸞聖人のご信心と一つとはいえない場合もあるような気がします。

（こんなことは）いずれも老いの繰り言ですが、書きつけてみた次第です。（私の命も）枯草に

かかった露のようなもの、いままで相伴って信心の道を歩んできた人々の不審をお聞きし、親鸞聖人が仰せになった趣旨を申しあげて参ったのですが、（私が死んで）眼を閉じたのちは、さぞかしさまざまな説が入り乱れるのではないかと歎きを抱き、このようなことを書いたのです。そんな説を言いふらす人々に言い負かされそうになったときは、親鸞聖人が気に入られてこころにかなったという聖典をしっかりとお読みになるべきです。おほよそ聖教（しょうぎょう）には、真実と権仮（ごんげ）（権も仮も「仮のもの」の意）が入り交わっているものです。権をすてて実をとり、仮をさしおいて真を用いるのが親鸞聖人のご本意です。用心して聖典を見、読み違いなどしないようにしてほしいと思います。そのため、大切な証しとなる文書の数々を少々抜き出して目安としてこの書に添えたのです。

親鸞聖人が常に仰せになっていたのは、「阿弥陀仏が五劫（こう）という永い間思索して立てられた本願をよくよく考えてみれば、それはひとえに親鸞一人のためのものだった。だから、それほどの業（ごう）を背負った身であるのに助けようと思ってくださる阿弥陀仏の本願がありがたいのだ」と述懐なさったことをいままた考えてみると、善導大師（ぜんどうだいし）の、「自分自身は罪悪を背負って生死（しょうじ）の世界を流転する凡夫（ぼんぶ）であり、永遠の過去から常に（この苦界に）沈み、常に流転してそこから脱却できない身であることを知れ」という金言と（親鸞聖人の言葉が）少しも違っていないのです。だからかたじけなくも、親鸞聖人はわが身に引きつけて、私たちが自分の身の罪悪のどれほど深いかも知らず、阿弥陀如来のご恩がどれほど高いかも知らないで迷っていることを思い知らせようと

なさったのです。

まことに阿弥陀如来のご恩ということに目をつむり、私も人も善悪ということばかり言い合っています。親鸞聖人は次のように仰せになりました。「私は善悪の二つについて、何も知りません。その訳は、阿弥陀如来のみこころに善しと思われるくらいに（私も善について）知り抜いたのであれば、善を知ったといえるでしょう。また、如来が悪しと思われるくらいに（私が悪について）知り抜いたならば、悪を知ったといえるでしょう。しかし、私は煩悩にまみれた凡夫、この世は火に燃える家のような無常の存在、全てはそら言であり、でたらめばかりであり、真実などは何一つありません。ただ念仏だけが真実です」と。ほんとうに、私も人もうそいつわりばかり言い合っているのですが、その中にひとつ歎かわしいことがあるのです。それは、念仏を申すにつけて、信心のあり方を互いに問答し、人に言い聞かせたりするとき、その相手の口をふさぎ、相論を終わらせようとして親鸞聖人がおっしゃらなかったことをおっしゃったと強弁すること、これは情けなくて歎かわしいことだと思うのです。このことをよくよく自分に問いかけ、留意すべきです。

これらのことは、私の言葉ではなく、また経典や注釈書の筋道もわからず、教義の浅い、深いを心得ているわけでもないので（私の言うことには）おそらくおかしなこともあるでしょうが、亡くなられた親鸞聖人のおっしゃったことの百分の一、ほんの一端ばかりでも思い出して書きつけたものです。悲しいことではないですか。幸いに念仏しながらも、直接浄土の真ん中に生まれ

ることなく、辺境の地に生まれるとしたら。念仏の行者（同朋（どうぼう）＝仲間）の中で、信心が異なるなどということがないように、泣く泣く筆を執ってこれを記します。名づけて『歎異抄（たんにしょう）』といいましょう。ほかの人には見せないでください。

蓮如による奥書

【原文】

右のこの聖教は、当流大事の聖教となすなり。無宿善の機においては、左右なく、これを許すべからざるものなり。　　釈蓮如（花押）

【現代語訳】

右のこの聖なる文書は、わが宗派の重要な聖典である。宿善（前世に積んだ善根）がなくて（信仰に）うといものは、たやすく本書を読むことを不許可とする。　　釈蓮如（花押）